

(私の視点) 大川小旧校舎 保存し防災教育の場に 野元弘幸

2016年1月23日05時00分



野元弘幸さん

東日本大震災の津波で74人の児童と10人の教職員が亡くなった宮城県石巻市の大川小学校の旧校舎を保存するか否かで、住民の意見が分かれているとの報道があった。私は、最終的な判断は遺族や地元住民、石巻市民に委ねるべきだと思うが、震災の教訓に学びながら防災教育プログラムの研究を行う立場から、「ぜひとも保存してほしい」と思う。

私は震災直後から、岩手県大船渡市で復旧・復興支援のボランティア活動に参加しながら、教育に関わる調査・研究活動をしてきた。2015年度からは全国の大学の社会教育研究者、施設職員、市民らと共同で「社会教育における防災教育のグローバル展開」というテーマで、災害で犠牲者を出さないための防災教育のあり方を検討し始めた。

私が被災地への支援や防災教育に今なお、緊張感を持って取り組むのは、大川小での悲劇を二度と繰り返してはならないという強い思いからだ。教育を研究し、大学で教員養成にも携わる者にとって、この悲劇は従来の研究・教育の姿勢に猛省を迫り、研究の枠組みの根本からの見直しを求めるものだった。これだけ自然災害の多い国で、私たち教育学の研究者は、学校や地域での防災教育の研究を切迫した課題として十分に位置づけてこなかった。過去を反省し、悲しい出来事を繰り返させないよう努めなくてはならない。

私自身、なかなか大川小を訪れる心の準備ができず、初めて訪れたのは13年2月。津波で大きく破壊された校舎の前に立ち、嗚咽（おえつ）が止まらなかった。犠牲者や遺族の思いを察すると、無念というほかない。そして、自責の念がこみ上げてくる。

震災後、被災者や被災地域、自治体によって記録や報告がまとめられているが、防災の取り組みをしっかりと行っていた地区や施設では犠牲者が少なかった。いま改めて、日ごろの防災訓練・学習の重要性が強く自覚されつつある。

その中で、被災地を訪れ、実態に触れ、語り部の話を聞く訪問学習が重要になっている。岩手県陸前高田市の旧道の駅「高田松原（タピック45）」の外壁にある14・5メートルの津

波到達点の表示を見て、初めて訪れた人は高さに驚く。自然の脅威を実感し、地元での防災の取り組みに被災地での学びを生かす姿が見られる。

今後、日本や世界各地で起きるであろう災害に向き合い、地域や学校で防災活動に取り組まなくてはならない人たちが、その教訓に学びながら「地域や学校でひとりの犠牲者も出さない」という誓いを立てる。そんな防災学習・教育の場として、大川小の旧校舎を残すことはできないだろうか。

(のもとひろゆき 首都大学東京准教授〈社会教育、防災教育〉)

◆投稿は手紙かsiten@asahi.comへ。電子メディアにも掲載します。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.